

# 「硫黄島からの手紙」という映画における武士道の「勇」、「礼」と「忠義」

## 序論

日本は長い軍事歴史を持つ東アジアにある国の一つである。それはアジアにある幾つかの国の侵略より、広島及び長崎が連合国により原爆投下される原因となった連合第2次世界大戦までである。この研究において分析される『硫黄島からの手紙』という映画は第2次世界大戦を設定にした。そのときにおいてアメリカは日本に侵入しやすいため、日本にある大事な島々を侵略する方法で日本を侵入した。その戦争において、栗林忠道に指揮される日本側は何千の兵を持ち、その中でも軍隊義務に参加している一般人もいる。その一般人は、比較的少ない兵であっても、彼らは激しい抵抗を行うことができた。このことは、硫黄島を守る強い意気を持つためであり、その意気は「武士道」と言われる。この映画において、国に対しての敬意として「武士道」また「武士」の精神がある。ある勇ましい武士にとって、戦争に退却することは最も恥ずかしいことであり、死ぬほうがましである。

## 本論

「武士道」または「侍の道」というのは日本の性質であり、日本社会の考え、感情及びの毎日の生き方に影響を与える武士の精神であり、また「武士」の階級が従う道德の原則である。「武士道」も宗教の教えの代わり及び日本人の道德や倫理の基準となる。そのため、この「武士道」という価値観は今

でも日本人の心に強くくっつくことも当たり前のことである。歴史から見ると、「武士道」の価値観は封建時代により出現し、発達し始めた。この封建時代には、社会階層化あるいは社会における差別が厳しく行われており、「武士」あるいは「侍」がその階層制度において最も高い階層にある。武士の階層は以下のほかの階層に尊敬され、恐れられ、鎖国政策を行う徳川時代により尊敬され、恐れられていた。

侍が約 250 年間にわたって尊敬される階層である。そのため、侍の価値観によって日本社会がきずかれた。鎖国政策が終わり、日本はアメリカのペリーによって開国させられても（明治維新が行われた）、この価値観はかわらないこと。

「勇」は「勇ましい侍」の意味であり、敬意のために自殺しても、死ぬことも恐れないという意味を持つ。

「勇気」の精神的の価値は忍耐及び純粋で大人しい心により証明される。その大人しさは安全の気持ちを生み出す勇ましい行動を起こす。武士道の思想では「勇」は死ぬことに恐れないだけでなく、より深い意味を持つ。従って、死は恐ろしいものではなく、立派に人生を終わらせるための勇気に基づく誇りである。

「礼」は敬意をあらわすと共に人生を献呈することである。武士道倫理の規則の一つである。

「礼」は間接的に威信及び名誉に対する意識であり、敬意を高くする

ことと共に侍の性質を表すことである。そのうえ、この「礼」も愛国心及び忠実を高くするものである。武士道は非常に忠実を高くする。武士道の考えでは戦争で、国のために死ぬことは誇り高いものである。それに、就職における義務及び権利を尊敬するためである。

「忠義」は忠実の倫理である。従って、「忠義」は人の心の広さである。

武士道の「忠義」にもとづき、人生は主人に仕える。理想的には敬意のためである。封建の道徳はほかの倫理制度及びほかの社会階層と違う考え方が、主人に対しての尊敬及び従順はその特徴である。個人的「忠義」は道徳的自我である。これは「忠義」が最も大事なものであることである。

この映画では播鉢山にいる日本軍は負けた。それに、アメリカ軍に囲まれていた。しかし、栗林中将によって考えられた作戦のおかげで、日本軍は硫黄島の山の中の洞窟を利用し、その洞窟に隠れることができるが、何人かの兵隊の中で討論及び恐慌が起きた。それは、兵隊たちはどんな行動をするべきかと困ったことである。播鉢山の指揮官である足立大佐が玉砕の許可を求めるために栗林中将を連絡するときその恐慌が続いていた。足立大佐は玉砕することが敬意であり、最後の手段と思っていた。しかし、栗林中将は北の洞窟にいる部隊を援護するほうが役に立つと思うため、足立大佐が許可をもらえなかった。しかし、足立大佐は自爆することを選んだ。この足立大佐及び播鉢山の兵が行った行動は「忠義」及び「勇」を表す。彼は国に対する忠実のために上司を従わなかった。

西中佐は軍人であっても、もとは競馬の選手であった。オリンピックで金メダルを受けた日本の競馬選手であった。彼は栗林中将に頼まれ、硫黄島の戦いに参加することにし、大好きな馬を連れ、硫黄島に行った。西中佐が指揮する部隊が追い詰められ、西中佐アメリカ軍の攻撃により爆弾の散弾に当てられ、目が見えなくなった。西中佐も捕まれた連合軍の兵の一人を救ったことがある。彼はその兵士を殺さず、逆にその兵士を治療し、その兵士に話しかけた。

このことによって西中佐の「勇」が表された。愛する国に対する忠実及び敬意は高い勇氣に基づくものである。国のため、命を失うことは恐ろしいものではない。

第2次世界大戦の時に生きていた栗林忠道（1891年7月7日—1945年3月23日）はにおける日本軍の高等兵である。硫黄島の戦いにおけるの成就に有名な中将である。彼に小さい島を守る責任を与えたのは東条英機であった。この戦で彼は空軍及び海軍の援護をもらわず、約2万の兵を指揮し、10万のアメリカ軍と戦っていた。栗林中将はこの絶体絶命になる戦いに向かい2件のことを推測した。それは、硫黄島は必ずアメリカ軍のものとなること及び彼も全ての部下もその戦いに死亡することである。しかし、彼は必死にその島を守り、アメリカ軍が硫黄島を侵略することに大損をするために戦っていた。栗林忠道中将は日本軍がアメリカ軍には敗北してから、つい自殺してしまった。栗林中将が表した「勇」というなら、すばらしいと考えてしまう。彼は空軍及び海軍の援護がなく日本軍を指揮、任数が5倍で良い装備を持つアメリカ軍を戦うこ

とに怯えていなかったことは素晴らしいものである。また、「礼」のために自殺することも素晴らしいである。

## 結論

「硫黄島からの手紙」という映画に描写される武士道の「勇」はただの勇氣ではなく、敵と戦う勇氣でもない。しかし、それは威信及び名誉を賭ける勇氣である。

ある人にとって武士道の精神を持つことは「礼」を非常に高く思うことである。「礼」は非常に崇高なものだと思われる。従って、「礼」を高く思う者は「礼」のために死ぬことを恐れない。

「忠義」はある武士にとって主人あるいは国に対する忠実である。彼らが従う「忠義」は死ぬまでの忠実である。主人に対しての「忠義」は最も大事なものであり、命をかけても、自分の大事なものより大事なものである。

## DAFTAR ISI

LEMBAR PENGESAHAN.....	i	
KATA PENGANTAR.....	ii	
DAFTAR ISI.....	iv	
<b>Bab I</b>	<b>PENDAHULUAN.....</b>	<b>1</b>
I.1	LATAR BELAKANG MASALAH.....	1
I.2	PEMBATASAN MASALAH.....	4
I.3	TUJUAN PENELITIAN.....	5
I.4	METODE PENELITIAN.....	5
I.5	ORGANISASI PENULISAN.....	8
<b>Bab II</b>	<b>YU 勇, REI 礼, CHUGI 忠義.....</b>	<b>9</b>
II.1	BUSHIDO.....	9
II.2	KEBERANIAN (勇, <i>yū</i> ).....	13
II.3	PENGHORMATAN (礼, <i>rei</i> ).....	17
II.4	KESETIAAN (忠義, <i>chūgi</i> ).....	20
<b>Bab III</b>	<b>ANALISIS FILM LETTER FROM IWO JIMA.....</b>	<b>24</b>
III.1	MAKNA BUSHIDO YANG DILAKUKAN TENTARA JEPANG DI GUNUNG SURIBACHI.....	24

III.2	MAKNA BUSHIDO YANG DILAKUKAN LETNAN KOLONEL NISHI.....	31
III 3	MAKNA BUSHIDO YANG DILAKUKAN JENDRAL TADAMICHI KURIBAYASHI.....	35
<b>Bab IV</b>	<b>KESIMPULAN.....</b>	<b>42</b>

**SINOPSIS**

**DAFTAR PUSTAKA**

**LAMPIRAN**

**BIOGRAFI PENULIS**